
血は水よりも濃い 銀魂

アクアマリン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血は水よりも濃い 銀魂

【Nコード】

N0430X

【作者名】

アクアマリン

【あらすじ】

夜兎の娘・李杏は、複雑な感情に囚われた。

大切な妹・李茜の崩壊。幼馴染だった神威の変貌。

「私は・・・何故？」

何を恨めばいいのか。何を信ずればいいのか。答えの無い問いの答えを、娘はただ追い求める。

過去の記憶

「おねえちゃん、おとうさんとおかあさん、どうしたの？ ひんやりして、うごいてくれないよぉ」

金髪をショートヘアーにした妹の李茜が声をかけてきた。

「李茜・・・」

そう呟いて李杏は妹を強く抱きしめた。

「おねえちゃん・・・？」

「ごめんね。李茜・・・。ごめんね・・・」

肩が小刻みに震え、涙が出そうになったが、努めて涙は流さなかった。

「おねえちゃん、何であやまつてるの？」

李杏は首を横に振ると李茜を離して言った。

「うっん。何でもないよ。・・・ねえ、李茜・・・神威兄ちゃんのこと、行きたい？」

李杏は心の底から行かない、と言うことを願った。しかし、何故か李茜は神威になつているようだった。

「うん、いきたい！」

李杏はそっか、と平気なふりをして言った。そして李茜の手を握り、空いた手に傘を持たせ、自身は灰色のマントを羽織り、傘をさした。

李杏はハッと目を覚ました。

何故かずっと昔の、いや、ほんの数年前の夢を、何度も見る。

（・・・私の運命が、変わってしまったからなの・・・？）

第七師団団長、神威。幼い頃は互いに馬鹿なことをし合ったものだ・・・。

（神威・・・）

貴方はいつの間になくなってしまったの・・・？貴方は・・・何をしていたの・・・？

問いたい事は山ほどあった。

眠れない。この夢で起きてしまうと、いつもこうだった。

（李茜・・・・・・・・・・）

あの子は変わってしまった・・・。

両親から頼まれた妹を、私は、私は！！捻じ曲げさせてしまった！！

あの子と共に生きるために、春雨に身を落した。

それが、

純粋なあの子を、捻じ曲げてしまつとは知らなくて……。

姉妹（前書き）

李杏^{りあん}：夜兔の娘。両親が死去し、妹を守ることが約束した。黒髪を1つにまとめている。青い瞳。

李茜^{りせん}：夜兔の少女。両親が死去し、姉に育てられた。金髪ボブ。青い瞳。

姉妹

李杏は必死になって神威を捜した。妹を生きさせたい。死んだ両親と交わした約束を胸に、ただただ、幼馴染を捜した。

何とか探し出し、通されると、思いもよらず神威は大きな力を握っていることに気付かされた。

「神威・・・」

李杏は李茜の手を一層強く握った。変わってしまった幼馴染が笑みを浮かべて目の前にいる。

「この子は無害だよ。下がってて」

部下が下がると神威から李茜を守る事ができるのは李杏しかいないことに不安を覚えたが、それを顔に出さないようにした。

「神威にいちゃん！」

李茜が嬉しそうにそう言った。李杏は小さい妹と目線をあわすと言った。

「李茜、ちょっと神威兄ちゃんと話があるからさ、ここの椅子に座って待っててくれない？」

李茜は嫌だと言っただだをこねたが、李杏が根気強く説得すると渋々頷いて椅子に腰掛けた。

「久しぶりだね」

そう言った幼馴染の腕を掴み、できるだけ李茜から離れる。

「分かっているのでしょうか？私が、何故ここに来たのか」

「覚えてくれていたみたいだね。昔のことなのに」

昔の事。彼が自身の父を殺そうとし、返り討ちに遭ったのはいつのことだっただろうか。自らの家を去る直前に、神威は淡々とこれからのことを話した。

<もし君が住む場所が必要になったら、春雨においでよ>

そう言った幼馴染の横顔が、今も瞼の裏に浮かぶ。

<その頃には、君を仲間にするくらいなんでもないようになってるからさ>

あの時は不吉な事言わないで、とつき返したのだが、結局こうなっ
てしまった。

「忘れられるわけないじゃない。貴方がしたことを聞いたときは・
鳥肌がたったもの」

後からおねえちゃん、まだー？と李茜が焦れた様に聞いてくる声が
した。それにあとちよつとだから、と答える。

「神威、お願い。私を、私を………」

こんなこと、言いたくなかった。けれども、けれども私は一人じゃ
ないのだ、と自分に言い聞かせる。そう、一人じゃない。李茜を、
妹を守らなければならないのだ。

「春雨に？」

言葉をつまらせた幼馴染の台詞を、神威が引き取った。辛くて涙が
こぼれそうになったが、神威が目の前にいたし、何より妹の前で泣
くわけにはいかなかった。

「ええ……」

李杏は涙を抑えて顔をあげ、幼馴染の目をしっかり見据えて言った。

「私を、春雨に入れて欲しいの」

カチリ、と耳元で鍵が閉まる音がした気がした。戻れないのだ。も
う、過去に戻ることは出来ない。

少女は娘へ

目の前で肩を小さく震わせている幼馴染を見ながら、神威はしばし昔のことを考えた。

「おねえちゃんったらー」

今よりももっと小さい李茜が、そう言っていた。黒髪の少女が、小さな妹と目線を合わせて微笑みを浮かべる。

「李茜も李茜でしょう？」

そう言ってフツツと楽しげに笑うと、幼馴染は神威に気付いた。

「神威。どうしたの？」

こちらに優しく微笑みかける幼馴染は、実際の年齢よりも少し大人びて見えた。

李杏。彼女と知り合ったのはいつのことだっただろうか。そんなことは覚えていないが、李茜が生まれたとき、ほんの数ヶ月前の李杏と比べると、少し大人になっていた気がする。

自分のしたこと、これからのことを話すと、李杏の顔から血の気がすつと引いた。そして慎重に言葉を選びながら彼女は言った。

「神威・・・貴方、誰に歯向かったのか・・・わかっていないの・・・？」

その瞳に恐怖が混ざっていたが、それよりもはるかに神威を案ずるかのような感情のほうが強く出ていた。神威が立ち去ろうとすると、李杏は神威の背中に悲しげに呼びかけた。

「神威っ！・・・貴方、神楽ちゃんのことも考えてあげてよ・・・。あの子は・・・。神楽ちゃんは、お父さんも口々に帰ってこないのに・・・。貴方まで失ったら・・・どう思っかわかっているの・・・？」

李杏はすっかり変貌した幼馴染を見つめていた。先ほどどこか違う。昔を思い出しているのかもしれない、と李杏は思った。

李杏は、ただ残された神楽が心配でたまらなかった。けれども、こちらはこちらで生活が苦しくなってきた頃だったので、なかなか見に行く事は出来なかった。

（神威・貴方は・・・）

神楽ちゃんに謝ってあげたの・・・？そう問いただしたかった。けれども、今の考え込んでいるような神威にそんなことを話しかけても恐らく無駄だろうということは分かっていた。

複雑だった。今も、昔も。李杏が抱えている感情は。

*

李茜は遠くから姉と神威を見つめていた。先ほどから何も話さないで向かい合っていた。

（おねえちゃんは・・・）

おねえちゃんは、ずるい、と思った。神威にいちゃんともっと話したかったし、ずっとこのまま座っていたら暇なのだ。先ほどもおねえちゃん、まだー？と言ってみたが、もう少しだからと相手にされなかった。

（あたしだって、ちゃんとお話できるのに）

今この胸に抱いている感情がどういったもののかはわからない。けれども、それと同じような感情を姉が持っていたら・・・？李茜の腹の底に黒い何かが疼いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0430x/>

血は水よりも濃い 銀魂

2011年10月9日15時54分発行